

胡適の提唱した 「整理國故」運動の二つの側面

船 引 一 乗

1920年代に中国文学界に起こった論争の一つに「整理國故」がある。今までこの運動は胡適が白話から文言に譲歩したもの、復古運動の一環としてとらえられていたが、現在ではその業績が見直されつつある。しかし「整理國故」運動がどのようにして起こり、胡適の「國故」に対する考え方、そしてこの運動が如何に社会に反映していったかはあまり論じられてこなかった。この論文ではどのような経過を経て「整理國故」が起こり、この運動が波及していったかを大きく四つに分けて、胡適を中心として探ってみたい。

第一節：雑誌『新潮』から

「整理國故」運動は一般には1923年胡適の「國學季刊發刊宣言」発表を契機として起こったものとされる事が多いが、もちろんこの前段階の運動も存在する。それが所謂「国故と科学論争」で、この論争が「整理國故」の発端となるのである。

1.『新潮』：「故書新評」

「国故と科学論争」の舞台となったのは雑誌『新潮』である。『新潮』は1919年1月、北京大学学生傅斯年、毛子水⁽¹⁾、などが中心となって発刊したもので、雑誌『新青年』に呼応して発刊された雑誌である。その基本精神は創刊号の「新潮發刊旨趣書」で「此『塊然獨存』之中國同浴於世界文化之流也」、「同人等深願爲不平之鳴、兼談所以因革之方」、「竊願鼓動學術上之興趣」、「總期海內同學去遺傳的科舉思想、進於現世的科學思想；去主觀的武斷思想、進於客觀的懷疑思想」の四つを掲げている。

「整理國故」を考えるうえで注目すべきは「故書新評」という記事で、以下に詳しくみていく。

この「故書新評」は1919年1月1日『新潮』創刊から1922年3月の廃刊までに僅か二回しか掲載されていないが、ここに『新潮』の古典作品に対する考え方がよく表れている。

まず「故書新評」の役割を「新潮發刊旨趣書」で以下のようにいう、

出版界評故書新評兩欄、商榷讀書之欄；此兩欄中就書籍本身之價值批

評者甚少、借以討論讀書之方法者甚多。

「故書新評」は「出版界評」と共に読書の方法を論ずる為の記事であるとし、同じ創刊号での傅斯年が書いた「故書新評」の始めに更に詳しく説明する。

本誌之作、原欲與海内同爲學生者、商榷讀書之方。故設『出版界評』一格、以爲輔助修業、啓善閑邪之資。然所收容物、勢必以新作爲限：若干年以往之著述、當在不論之列。吾人研究文籍、雖不可不偏重今世、勢亦不能盡棄故作。已往著述、固多存永久價值者；志爲學人、理必從事。於是別設此『故書新評』一欄、以爲彼欄之補助。

つまり「出版界評」と「故書新評」は前者が現在の出版物、後者が古典作品を紹介するものであり、「故書新評」が「出版界評」を「補助」するものであった。

では如何にして古典作品を読むのか。

今之論者、間有謂故事可以根本不讀、其實此種辦法、事實上做不下去。

平情言之、故書亦未嘗不可讀、要必以科學方法爲之條理、近代精神爲之宰要、批評手段爲之術御。

「科學方法」「近代精神」「批評手段」を手段として古典を読まないといけなさと主張したのである。そしてこの精神をより具体化したものが後に触れる毛子水の「國故和科學近代精神」である。

それではこの故書を読むという事は欠くべからざるものであったのかそれとも不要不急なものであったのか。この事は「故書新評」が「出版界評」の「補助」であるといっている箇所からわかるように、二次的なものとの認識していたといえる。そしてこの点を直接言及しているのが1919年4月出版の『新潮』第一巻第四号の「故書新評」である。

この号の「故書新評」(傅斯年著)では読者のこの記事に対する評価が反対と賛成に分れたので、「讀故書」における二つの事を明示したものである。一つ目は、

我以爲中國人讀故書實在是件不急的事：因爲披沙揀金是件不容易的事。所以照真正條理說起來、應當先研究西洋的有系統的學問等到會使喚求學問的方法了、然後不妨分點餘力、去讀舊書。只可惜這件事很不容易辦到。一般的人對於故書、總有非常的愛情、總不肯稍須放後些。所以不得不『因利乘便』就讀故書的方法討論一番了。

二つ目に、

我做這故書新評並不是就一部舊書的本身批評、只是取一部舊書來、借題發揮、討論讀故書的方法。

一つ目に「讀故書」はここでも不要不急のもの、それよりも系統だった西洋の學問を研究して、その後「讀故書」を行うべきであるが、人々の故書

に対する非常な愛着があるので、やむを得ず「故書新評」の記事を作った、二つ目として「故書新評」は古書を用いてその読み方を討論し合う場であると述べた。つまりは西洋の学問が第一であり、「讀故書」はやはり二次的な位置づけであったのである。

しかしこの「讀故書實在是件不急的事」との主張からこの『新潮』が古典作品を軽く見ていたとはいえないのである。この号の「故書新評」の「清代學問的門徑書幾種」では清代の学問を具体的に十三部の書籍を挙げ、研究する事を勧めている。そして文末に、

我希望有人在清代的樸學上用功夫，並不是懷着什麼國粹主義，也不是誤認樸學可和科學並等，是覺着有幾種事業，非借樸學家的方法和精神做不來。

と述べ、‘樸學家の方法’⁽²⁾で次の事をして欲しいとする。その事業とは、

整理中國歷史上的一切學問。中國學問不論那一派，現在都在不曾整理的狀態之下，必須加一番整理，有條貫了，纔可給大家曉得研究。

中国歴史上のすべての学問を整理、筋道を立て、はじめて人々が研究できることであつた。

以上『新潮』の「故書新評」を通して「讀故書」の態度をみてきた。この段階ですでに中国歴史上の一切の学問を整理し、その方法として「科學方法」「近代精神」「批評手段」「樸學家的方法」を用いるべしとの認識を示しているが、「讀故書」は二次的な役割しか持っていなかった。そしてこれらの認識の上に立って書かれた論文が「國故和科學的精神」である。

2.「國故和科學的精神」

上述した1919年1月1日及び1919年5月掲載の「故書新評」をまとめ、発展したものが1919年5月1日『新潮』第一卷第五号の毛子水「國故和科學的精神」である。これまでは二次的な役割しか持たされてなかった「讀故書」が、「國故」に発展していき、大きく取り上げられることとなった。

ここでは全体を五つの段落に分けて論じている。最初に毛子水は次のように「國故」を定義する。

國故就是中國古代的學術思想和中國民族過去的歷史。（「什麼是國故呢？」）

今まで各人様々で曖昧であつた「國故」を中国古代の學術思想と中国民族の歴史であるとまずはっきりと明示した。

二段落目に「國故在今日世界學術上的位置」を論じる。ここで中国の讀書人は國故に対して二つの誤解を抱いているとした。その二つは、

(1) 國故和「歐化」（歐洲現代的學術思想）爲對等的名稱，這二種就是世

界上學術界裏爭霸爭王的兩個東西。

(2) 國故有神秘不可思議的技能：歐洲的學術，國故裏面沒有不備的；而國故裏面有許多東西，歐洲是沒有的。

一つは「國故」を「歐化」と対等のものと認識している事。もう一つはヨーロッパの學術で、「國故」にないものではなく、「國故」の中にはヨーロッパにないものがたくさんあるとの考えである。

一つ目は何故誤解だとするのか。毛子水は、

第一種の誤處，在沒有曉得學術的性質和歷史。我們倘若單講到學術思想，國故是過去的已死的東西，歐化是正在長的東西；國故是雜亂無章的零碎智識，歐化是有系統的學術。這兩個東西，萬萬沒有對等的道理。

「國故」は過去の既に死んだもの、乱雑で細々した智識で、「歐化」は現在も成長中の系統的な學術であり、到底対等である理由などないとした。さらに誤解の理由として毛子水は他では見られない独自の意見を述べる。

我們現在就是把國故『國新』並列，亦覺得不倫不類，因為『國新』亦是正在生長的東西。

この「國新」という概念はこれ以前にも以後も見られない毛子水独自の意見である。どのようなものかという、毛子水は、

『國新』就是現在我們中國人的學術思想。（～中略～）倘若現在我們中國人的學術思想的程度，同歐洲人的一樣，這個『國新』就和歐化一樣。

「國新」とは現在の中国の學術思想であり、もし今の中国人の學術レベルがヨーロッパ人と同程度なら「國新」と「歐化」は同じものであるとの意見である。そして「這個和歐化一樣的『國新』，無論是我們自己創造的、或從歐化裏面吸收來的、都是正當的」と続く。つまり毛子水にとって學術とは自分で作り出そうと、ヨーロッパから吸収しようともどちらも正当なものであった。ただ未だ研究もされず系統だっていない「國故」が問題であった。

二つ目の問題点は、「國故的性質和功用」を説明すればはっきりするとし、國故の性質と効用二つに分けて述べる。それは、

(1) 國故的一部分是中國一段學術思想史的材料。

(2) 國故的大部分是中國民族過去的歷史的材料。^(注1)

とした。しかしこの言い方では文頭で定義づけた「國故」は「國故就是中國古代的學術思想和中國民族過去的歷史。」と異なってくる。それ故毛子水は上記のように注をつけてこう言う、

國故的大部分，實在就是中國民族過去的歷史。但是從前人所做的從前人的歷史，我們現在不能用他；因為現在人的歷史的眼光，十分之八九不應當和從前人的相同，所以我們現在的歷史，大部分都應當從我們自己

的歷史的眼光新做出來，方能合用。

「國故」は「中国民族過去の歴史」ではあるが、現在の中国にはそのままでは役に立たない。「歴史的眼光」で役に立つかどうか見直さないといけないから、「材料」であるとした。それ故毛子水は現在の中国の「學術史」は、

中國的學術史，就重要的方面講起來，不要說比不上歐洲近世的學術史，還比不上希臘羅馬的。（～中略～）所以國故在今日世界學術上，佔不了什麼重要的位置。

ヨーロッパの學術とは比べるべくもなく、それ故世界の學術においては、何等重要なものではないと主張したのである。

三段落目に「國故是應當研究的麼」として國故は研究するべきかどうかを論じる。毛子水は研究すべきだとするが、その理由として二つを挙げる。

一國の學術史和一國民族的歴史，無論重要不重要，在世界學術上，總算佔了一個位置。

我們中國向來沒有什麼好的學術史，亦沒有什麼真可以說得好的民族的歴史。倘若我們從研究國故的結果，得了他們，豈不可樂麼？

もし「國故」を研究すれば、中国の學術史と民族の歴史が世界の學術史の上においてのそれなりの位置を築く事ができ、今まで中国になかった優れた學術史が完成すればそれはそれで喜ばしい事で、それ故に研究すべきとした。

そしてこのような目的で「國故」を研究すれば、

我們就可以知道中國從前的學術思想和中國民族所以不很發達的緣故；我們亦就可以知道用什麼法子去救濟他。

これまで何故中国が発展しなかったのか、その原因を探り、救う手立てを見つけることができるとした。すなわち毛子水にとって「國故」を研究することの目的は、中国を救う方法を考え出すことでもあったのである。

四段落目に「研究國故的人所應當知道的事情」を述べる。まず「科學的精神」を持った人間が、はじめて「國故」を研究することが許されるところでも繰り返した後で、上の条件を満たさず研究している人間に対して、

現在有一班研究國故的人，說他們的目的是『發揚國光』。這個意思，最個誤謬。要知道，研究國故能夠『發揚國光』，亦能夠『發揚國醜』。

國威発揚のことばかりを考えて「發揚國醜」したがない。同じようなことは最後の五段落目「我對於國故和國故學的感想」にも、

近來研究國故的人，多不知道國故的性質，亦沒有科學的精神。他們的「研究國故」，就是『抱殘守缺』。

「科學的精神」を持たない人間の研究は「抱殘守缺(昔のことに固執して缺點にしがみつく)」でしかないと主張した。

以上毛子水の「國故和科學的精神」を通して「國故」を見てきた。「國故」とは「科學的精神」でもって系統的に中国學術を再總括していくことであり、それによって中国が発展してこなかった理由を探し出し、これからの為に役立てようというものであったが、それよりも西洋學術を吸収する方が急務との認識であり、これは後述する胡適の考えとは異なるものであった。

第二節：学者・胡適

『新潮』で「國故と科學」の論争中から胡適は「整理國故」の問題について言及してくる。では胡適はどのように「整理國故」を行っていかうとしたのか。大きく二つに分けて考えていく。

1.「論國故學一答毛子水」

毛子水の「國故和科學的精神」が発表された後すぐにその反論が現れた。それは1919年5月5日に張煊が『國故月刊』の発表した「駁新潮國故和科學的精神篇」である。張煊は逐一毛子水の意見に反対するが、要約すれば、「國故」は死んだものとしているが、生死などは基準にならない、中国与西洋の文明は対等なものである、歐化などはとるに足らぬものである、等の意見である。

それに対し毛子水も1919年10月『新潮』において『駁新潮「國故和科學的精神」篇』訂誤」をすぐさま発表して再反論する。

この『駁新潮「國故和科學的精神」篇』訂誤」で毛子水は、「國故和科學的精神」ですでに言ってきたことを繰り返し述べ反論するのであるが、この論文の文末に胡適の文章も併せて掲載している。これが後に「論國故學一答毛子水」と呼ばれる文章である。

胡適は毛子水の意見に賛同し、張煊の意見を一蹴し、「『國故學』的性質不外乎要懂得國故,這是人類求知的天性所要求的」と「國故」が人類の生まれ持った要求であるとした。

しかし胡適が全面的に毛子水に賛成したのではない。毛子水の『駁新潮「國故和科學的精神」篇』訂誤」での文を引用して批判する。毛子水の文とは、

我們把國故整理起來,世界的學術界亦許得着一點益處,不過一定是沒有多大的。……世界所有的學術,比國故更有用的有許多,比國故更要緊的亦有許多。⁽³⁾

毛子水是「整理國故」は世界の学术界に貢献することではあるが、世界の學術の方を研究するほうがもっと重要であると述べた。この意見は『新潮』の「故書新評」で「我以爲中國人讀故書實在是件不急的事」ともあったように『新潮』の編集者の中では、西洋の學術の吸収、「歐化」の方が重要であったのだ。これに対し胡適は、

我以爲我們做學問不當先存這狹義的功利觀念。做學問的人當看自己性的所近，揀選所要做的學問，揀定之後，當存一個『爲眞理而求真理』的態度。研究學術史的人，更當用『爲眞理而求真理』的標準去批評各家的學術。學問是平等的：發明一個字的古義，與發現一顆恆星，都是一大功績。

役立つかどうかは學問をするうえで何等重要ではなく、『爲眞理而求真理』の態度で各々の學術を研究するべきであるとの批判であった。毛子水等『新潮』編集者の「國故」の二次的な役割を否定し、「國故」は世界の學術を研究することと同様もしくはそれよりも重要であると、「國故」を研究することを高く評価した。

ここで胡適は古書を研究するという學者の立場から発言している。この學者としての「國故」に対する態度、方法等を述べた文章が次に挙げる「新思潮的意義」である。

2.「新思潮的意義」

「論國故學」で「整理國故」の重要性を説いた後発表したのが「新思潮的意義」である。これは1919年12月に『新青年』（第七卷第一号）に掲載されたものである。この論文は「整理國故」に関することだけでなく、その当時の李大釗との間で起こった「問題と主義論争」についても言及しているが、今はそのことについては触れない。

この論文には見出しがあり、それは「研究問題」「輸入學理」「整理國故」「再造文明」である。この四つが新思潮の核心部分になるのである。

では胡適は新思潮をどのように考えていたのか。胡適はこう言う。

新思潮の根本意義只是一種新態度。這種新態度可叫做『評判的態度』。(～中略～)尼采說，現今時代是一個『重新估一切價值』(Transvaluation of all Values)的時代。『重新估一切價值』八個字便是評判的態度的最好解釋。

新思潮とは「評判的態度」であり、それで一切の価値を新たに計り直すものであった。

そしてこの新思潮が中国の古典學術に対する態度もまた「評判的態度」で臨むべきとし、この態度を三つに分けてこう言う、

分開來說，我們對於舊有的學術思想有三種態度。第一，反對盲從；第二，

反對調和；第三，主張整理國故。

旧學術に対して第一、第二の態度は消極的な手段であり、第三の「整理國故」が積極的な手段とした。そして胡適は「整理國故」を四段階に分ける。その四つは、

第一步は條理系統的整理。

第二步是要尋出每種學術思想怎樣發生，發生之後有什麼影響效果。

第三步是要用科學的方法，作精確的考證，把古人的意義弄得明白清楚。

第四步是綜合前三步的研究，各家都還他一個本來真面目，各家都還他一個真價值。

系統的な整理、學術思想の發生とその影響、科學的な方法を用いる、この三つを合わせてその本来の価値を見出すことが「整理國故」とした。

では胡適が「評判的態度」を用いて最終的に目指したものはなにか。

新思潮の精神是一種評判的態度。

新思潮の手段は研究問題與輸入學理。

新思潮の將來趨勢，依我個人的私見看來，應該是注重研究人生社會的切要問題，應該於研究問題之中做介紹學理的事業。

新思潮對於舊文化的態度，在消極一方面是反對盲從，是反對調和；在積極一方面，是用科學的方法來做整理的工夫。

胡適は「新思潮」の精神を「批判的態度」、「新思潮」の手段を「研究問題與輸入學理」、それ等を用いて「新思潮」が旧文化に対する態度は「用科學的方法來做整理的工夫」であるとし、

新思潮の唯一目的は什麼呢？是再造文明。

であり、これが胡適「整理國故」の最終目的であつた。今までの価値をもう一度計り直し、そして少しずつ文明を作り直す。その為に「整理國故」は文化の再評価という積極的な意味を持ったのである。

第三節：教育者・胡適

第二節では文化を再評価していくことが「整理國故」の一つの重要な目的であることをみた。この第三節では角度を変えて「整理國故」の別の側面をみていく。

1. 胡適の「古文」とは。

胡適はアメリカから歸国直後の1917年9月に北京大学教授に就任した。この時はじめて学生に直接接した為であろうか、これ以後教育に関する論文を多数発表していく。そしてこの論文の中に胡適の「古文」や「國

故」に対する考え方も現れているのである。

胡適はどのように「古文」を捉えていたのか。北京大学教授就任のほぼ半年後の1918年5月15日に「論文學改革的進程序」を書き、「古文」をこのように説明する。

若必須從學校教育一方面着想，似乎還該從低級學校做起。進行的方法，在一律用國語編纂中小學校的教科書。現在所謂『國文』，定爲『古文』，須在高等小學校第三年以上始開始教授。『古文』的位置，與『第一種外國語』同等。教授『古文』，也用國語講解；一切『模範文』及『典文』的教授法，全用國語編纂。

ここで胡適は『古文』を『外國語』と同様のものとして位置づけ、それを高等小学生に教え、「國語」と「古文」を分けるべきものとしている。

同じような意見は、1918年8月14日に書かれた「答黃覺僧君折衷的文學革新論」にも現れている。ここでも最初は「國語」について述べられている。

我們可以爲先須有『國語的文學』，然後可有『文學的國語』；有了『文學的國語』，我們方才可以算是有一種國語了。現在各處師範學校和別種學校也有教授國語的，但教授的成績可算得是完全失敗。失敗的原因，都只爲沒有國語的文學，故教授國語沒有材料可用。

「國語」教授の問題の原因は「國語」にあるのではなく、その教材の不備にあるとした。この当時新文學運動がはじまってまだ間もなく、教材の不備はどの科目でも問題になっていたであろう。「國語」の教科書と同様、「古文」の教科書もまだ旧教育で用いていた教科書の域を出なかった、これを如何に今の教育に適合していくか、この頃から胡適の中ではすでに問題となっていたのではないであろうか。

続けて胡適は様々な教育界における問題を提示する。

現在中國人是否該用白話做文學？這是一個問題。中國現在學堂裏是否該用國語作教科書？這又是一個問題。如果用了國語做教科書，古文的文學應該佔一個什麼地位？這又是一個問題。我們研究文學的人是否該研究中國的舊文學？這另是一個問題。我們對於這幾個問題的主張，是：（一）現在的中國人應該用現在的中國話做文學，不該用已死了的文言做文學。

（二）現在的一切的教科書，自國民學校到大學，該用國語編成。

（三）國民學校全習國語，不用『古文』。（『古文』指說不出聽不懂的死文字。）

（四）高等小學除國語讀本之外，另加一兩點鐘的『古文』。

（五）中學堂『古文』與『國語』平等。但徐『古文』一科外，別的教科書都用國語的。

(六)大學中、『古文的文學』成爲專科，與歐、美大學的『拉丁文學』『希臘文學』佔同等的地位。

(七)古文文學的研究，是專門學者的事業。但須認定『古文文學』不過是中國文學的一個小部分，不是文學正宗，也不該阻礙國語文學的發展。

教科書の言語の問題、「古文」の位置づけ、大学での「古文」の教え方等である。1919年1月に発表された「論國故學—答毛子水」以前にすでに「古文」を如何に研究するか、「古文」を如何に現代教育に適合させるかが、胡適の中で問題であったのである。

2. 中学の国文課程。

「論文學改革的進程序」と「答黃覺僧君折衷的文學革新論」では大まかに教育界における問題に触れたが、より具体的に教育の問題に言及したのが、1920年9月1日に『新青年』で発表した「中學國文的教授」である。ここではまず民国元年に出た『中學校令施行細則』第三條「國文要旨在通解普通語言文字，能自由發表思想，並使略解高深文字，涵養文學之興趣，兼以啓發智德。」⁽⁴⁾を挙げ、これは理想として間違っていないが、この理想と現実はかけ離れている。その理由は理想が高すぎるからではなく、方法が誤っていたからであると述べる。そして現状を踏まえ暫定的に標準を定めると、

我承認元年定的标准不算過高，故斟酌現在情形，暫定一個中學國文的理想標準：

- (1) 人人能用國語(白話)自由發表思想，一作文，演說，談話，一都能明白通暢，沒有文法上的錯誤。
- (2) 人人能看平易的古文書籍，如二十四史、資治通鑑之類。
- (3) 人人能作文法通順的古文。
- (4) 人人有懂得一點古文文學的機會。

「國文」の科目には現代の国語で文章を書いたり、意見を発表する、現代文の授業と、簡単な古文(史書や文学作品)を読み、古文を書く能力を身に付ける古典の授業が含まれていた。

では現場の中学校での国文のカリキュラムはどのようにするのか。現行のカリキュラムと理想のカリキュラムを挙げる。

現状の中学国文のカリキュラムは、

- | | |
|---------------------|----|
| 第一年：講讀，作文，習字。 | 共七 |
| 第二年：講讀，作文，習字，文字源流。 | 共七 |
| 第三年：講讀，作文，習字，文字要略。 | 共五 |
| 第四年：講讀，作文，文字要略，文學史。 | 共五 |

では胡適が提唱するカリキュラムは、

- | | |
|---------------------|----|
| 年一：國語文一，古文三，文法與作文一。 | 共五 |
| 年二：國語文一，古文三，文法與作文一。 | 共五 |
| 年三：演說一，古文三，文法與作文一。 | 共五 |
| 年四：辯論一，古文三，文法與作文一。 | 共五 |

この胡適が提唱したカリキュラムを見れば、国文における古文のコマ数が国語文よりも断然多いことがわかる。では何故「古文」がこのように多く、当時盛んになっていた「國語」の教科がたった二時間しかないかといえ、

(1)第三四年的演說和辯論都是國語與國語文的實習，故這兩年可以不用國語文了。

(2)我假定學生在兩級小學時已有了七年的國語，可以够用了。

「國語」や「國語文」は小学校ですでに基礎部分は習得しておくものとされ、一段上の中学では、その演習としての演說や議論を学ぶ場所としている。言い換えれば、中学の国文では国語の基礎でもって、古典を学ぶことが主要なテーマであった。

そしてこの「古文」をどのような教科書を用いて教えるのかに言及する。胡適は中学の古典の教材を第一年生と第二三四年生に分けて挙げる。

第一年生は、

中學古文的教材。

(1)第一學年 第一年專讀近人的文章。例如梁任公、康長素、嚴幾道、章行嚴、章太炎等人的散文，都可選讀。此外還應該多看小說。林琴南早年譯的小說，(～中略～)還有著作不多的學者，如蔡子民答林琴南書，吳稚暉上下古今談序，又如我的朋友李守常、李劍農、高一涵的古文，都可選讀。

第二三四年生は、

(2)第二三四學年 後三年應該多讀古人的古文。我主張分兩種教材：

(甲)選本 不分種類，但依時代的先後，選兩三百篇文理通暢，內容可取的文章。從老子、論語、檀弓、左傳，一直到姚鼐、曾國藩，每一個時代文體上的重要變遷，都應該有代表。這就是最切實的中國文學史；此外中學堂用不着什麼中國文學史了。

(乙)自修的古文書 最重要的還是學生自己看的書。一個中學堂的畢業生應該看過下列的幾部書：

(a)史書：資治通鑑或廿四史。(或通鑑紀事本末。)

(b)子書：孟子、墨子、荀子、韓非子、淮南子、論衡等等。

(c)文學書：詩經是不可不看的。此外可隨學生性之所近，選習兩三部專集，如陶潛、杜甫、王安石、陳同甫……之類。

このようにかなりの量の書物を挙げて、中学生の学習する範囲を示す。ただ胡適もこの分量の多さには批判があるだろうと述べ、その批判の回答を三つ挙げる（しかしここでは第一しか触れない）、

（第一）從前的中國文所以沒有成效，正因為中學堂用的書只有那幾本薄薄的古文讀本。（～中略～）我自己從來背不出一篇古文，但因為我自小就愛看小說，看史書，看雜書，所以我還懂得一點古文的文法。古文的選本都是零碎的，沒頭沒腦的，不成系統的，沒有趣味的。因為沒有趣味，所以沒有成效。我可以武斷現在中學畢業生能通中文的，都是自己看小說、看雜誌、看書得來的，決不是靠課堂上幾本古文選本得來的。

從來の古典で用いている書物は、細々して、掴みどころがなく、系統的でもなく、面白みもないものであった。胡適自身は中学卒業で中文に通じているのは、小説、史書、雜書などを読んだものと断じている。胡適の目指す「國文」とは、これら今まで教室の外で読まれていたものを教室の中に引き入れよう、というものであった。しかし今まで用いていた教科書は「零碎的、沒頭沒腦的、不成系統的、沒有趣味的」の類であり、上述した様々な書籍も未だ整理されておらず、これらの書籍を如何に再検討、整理するかが急務になってくる。

3.「研究國故的方法」

「中學國文的教授」では「古文」の教科書の不備を明らかにした。ならばどのように魅力ある教科書を作ることができるのか。その方法を示したのが1921年8月『時事新報・覺悟副刊』に掲載された「研究國故的方法」である。

この論文は「整理國故」の必要性を説くものではなく、「整理國故」の成果の対象を青年に定め、その為如何に整理するかが問題となる。最初に現在「國故」研究には確かに需要があるが、

但是一般青年，對於中國本來的文化和學術，都缺乏的興趣。

と、中国の青年は「國故」に対して興味がないという。ここではどうして青年が「國故」に対して興味がないのか、言い換えるとどうすれば青年が「國故」に興味をもてるのかという所から説き起こしている。では何故興味がないのか。その理由として二つ挙げる。

一、古今較起來，舊有的東西就很現出破綻。

二、中國的國故書籍，實在太沒有系統了。

だから、「國故」を系統だったものにしなければならないと以前からの持論を繰り返す。そしてこれ以後はその方法として、「歴史的觀念」「擬古的態度」「系統的研究」の必要性を説き、最後に「整理」を二つに分ける。

①形式方面 加上標点和符号，替它分開段落來。

②内容方面 加上新的注釈，折中舊有的注釈。

つまり「國故」の成果の対象が青年である以上、標点符号、段落、新たな注釈を加え、読みやすくしなければならなかった。そしてこの青年を対象にしたことが、今後の展開に大きな影響を与えるのである。

4.「再論中學的國文教學」

上の「中學國文的教授」にあった「國文」の理想計画は二年後に修正を迫られた。それが「再論中學的國文教學」である。

まず以前に打ち出した四つの「理想標準」(年一：國語文一、古文三、文法與作文一 共五。年二：國語文一、古文三、文法與作文一 共五。年三：演說一、古文三、文法與作文一 共五。年四：辯論一、古文三、文法與作文一 共五。)を以下のように三つに修正する。

(1) 人人能用國語自由發表思想；作文，演說，都能明白曉暢，沒有文法上的錯誤。這一條與舊主張第一條無大差異。(～中略～)

(2) 國語文通順之後，方可添授古文，使學生漸漸能看古書，能用古書。學生先學習國語文到了明白通順的程度，然後再去學習古文，所謂『事半功倍』，自然是容易的多。(～中略～)

(3) 作古體文但看作實習文法的工具，不看作中學國文的目的。(～中略～)

以前の「中學國文的教授(『新青年』八卷一號)」と見比べると、「古文」が後ろに退き、「國語」が前面に推し出でいる。その理由はこの間に胡適が考えていたほど「國語」が世の中に浸透しなかった為と、もう一つ古典の教科書の問題(この問題はこの論文の(四)古文の教材和教授法で述べられている)であろう。続けて中学生の「國文」の理想標準を二つに分けて説明する。

一つ目は、

(1) 在小學未受過充分的國語教育的，應該注意下列三項：

(一) 宜先求國語文的知識與能力。

(二) 繼續授國語文至二三學年，第三四學年內，始得兼授古文，但鐘點不得過多。

(三) 四學年內，作文均應以國語文爲主。

二つ目は、

(2) 國語文已通暢的、也分爲下列三項：

(一) 宜注重國語文學與國語文法學。

(二) 古文鐘點可稍加多，但不得過全數三分之二。

(三) 作文則仍應以國語文爲主。

以記のように「國語」教育を受けているかいなかで二つに分けた。ここでも「古文」のことが表に打ち出されておらず、「國語」が主である。しかし胡適は「古文」を輕視したのではない。ではどうして三年前のような「古文」にたいする膨大ともいえる要求がなくなったのか。それは第四段「古文的教材和教授法」に答がある。

胡適は三年前の主張を以下のようにいう、

我三年前の主張。這個理想的計畫，到現在看來，很象是完全失敗了。

(～中略～)但這種失敗，我還不肯認爲根本的失敗。我至今承認我當年主張的理由(文存第一集卷一、頁二二六—七)沒有什麼大錯。我以爲我的主張此時所以不能不失敗，只爲了一個原因，就是沒有相當的設備。

三年前打ち出した計畫は失敗に終わったことを認めたが、その失敗の原因はその提唱した中身に問題があるのではなく、「相當的設備」がないことに起因していると述べた。胡適は教材についてどのように考えていたか、続けて、

三四年前普通見解總是愁白話文沒有材料可教；現在我們才知道白話文還有一些材料可用，到是古文竟沒有相當的教材可用。我曾說『那幾本薄薄的古文讀本是決不會教出什麼成績來的。』這話我至今認爲不錯。但除了那本古文讀本之外，還有什麼適當於教科的書籍嗎？我提唱學生自讀古書，但是有幾部古書可以便於自修呢？我曾舉資治通鑑，但現行的資治通鑑，一宋本，百衲本，局本，石印，一那一部可以供普通中學學生的自修呢？

数年前白話文の教材がないことが心配の種であったが、今は古文の教材がないことが問題である、とした。そしてかつて挙げた古典の書物も自修には全く適していないと自分の以前提唱したものを否定した。これらを改善するには「相當的設備」を整える必要がある。ではこの「相當的設備」とは、

總之，我說的『沒有相當的設備』，是說古書現在還不會經過一番相當的整理。古書不經過一番新式的整理，是不適宜於自修的。

つまり古書を整理して、自修に耐えうるものにしてはじめて古典の教科書になりうるものになるとした。

そしてどのように整理するかといえば、

(1) 加標點符號。

(2) 分段。

- (3) 刪去繁重的, 迂謬的, 不必有的舊注。
- (4) 酌量加入必不可少的新注—這兩條, 我且舉一個例。(～中略～)
- (5) 校勘 用古本善本校勘異同, 訂正訛脫。
- (6) 考訂其假 (～中略～)
- (7) 作介紹及批評的序跋 每書應有詳明的序跋, 內中至少應有下列各項:
 - (a) 著作人的小傳。
 - (b) 本書的歷史 如序書經, 應述『今古文』的公案。
 - (c) 本書的價值 如序詩經, 應指出他的文學價值。

以上が整理の方法である。そしてこの方法で古典(胡適は31種類の書物を挙げる)を整理し、『中學國故叢書』作成すれば、

有了這幾十部或幾百部整理過的古書, 中學古文的教授便沒有困難了。

教材有了, 自修是可能的了, 教員與學生的參考材料也都有了。教員可以自由指定材料, 而學生自修也就有樂無苦了。

教員、學生共に困難がなくなり、自修もこなすことができるようになると文を結ぶ。これが胡適の「国文」の理想の授業だったのであり、その為の教科書を作るには「整理國故」が不可欠なものであった。

第四節: 胡適の「整理國故」

以上に「整理國故」の大きな二つの流れ、学者の為の「整理國故」と学生に教える為の「整理國故」をみてきた。これがどのように結集していくかをみていく。

1. 学者の立場から。

胡適は1923年1月「國學季刊」を創刊した。この雑誌は1922年3月16日『北大月刊』廃刊後、四つのより専門的な雑誌、『国学季刊』主編胡適、『文芸季刊』主編蔡元培、『自然科学月刊』主編仲達負、『社会科学季刊』主編王世杰の内の一つで、1923年から1937年まで続いた。そして創刊号に胡適が「國學季刊發刊宣言」を書いている。

まず胡適は最近の動き—西洋學術が古學を滅ぼす、孔教は中国の古文化を代表する等の意見—を評して、

這些反動都只是舊式學者破產的鐵證; 這些行爲, 不但不能挽救他們所憂慮的國學之淪亡, 反可以增加國中少年人對於古學的藐視。如果這些舉動可以代表國學, 國學還是淪亡了更好!

これらの運動は反動とし、かえって青少年の古典に対する輕蔑を増すばかりである。しかし胡適は自分が提唱している国学の将来を、

我們深信，國學的將來，定能遠勝國學的過去；過去的成绩雖然未可厚非，但將來的成績一定還要更好無數倍。

と述べ、「國學」の將來を輝かしいものと宣言する。そして明末から現在にかけてを「古學昌明時代」と規定し、その成果として「整理古書」「發見古書」「發見古物」の三つを挙げた。しかしこれらの成果にも三つの欠点がある。それは、「研究的範圍太狹窄了」「太注重功而忽略了理解」「缺乏參考比較材料」であり、これらの欠点を反面教師とし今後の國故研究は以下の三つのことに注意しなければならないとした。

一つ目は「擴大研究範圍」である。まずここで胡適は「國故」性質をいう、

中國的一切過去的文化歷史，都是我們的『國故』；研究這一切過去的歷史文化的學問，就是『國故學』，省稱為『國學』。『國故』這個名詞，最為妥當；因為他是一個中立的名詞，不含褒貶的意義。『國故』包含『國粹』。

「國故」は「中國的一切の過去の文化歷史」であり、以前『新潮』で「國故」を「國故的一部分は中國一段學術思想史的材料。國故の大部分は中國民族過去の歷史的材料」と規定したものと比べると「材料」がない。『新潮』ではでたらめの歴史を「歷史的眼光」で整理し、それを現在に役立てる「材料」であったが、胡適は歴史全体が「國故」であり、「學問」という研究対象であった。では如何に研究範圍を拡大するのか。

我們所謂『用歷史的眼光來擴大國學研究的範圍』，（～中略～）上自思想學術之大，下至一個字，一隻山歌之細，都是歷史，都屬於國學研究的範圍。

ここでも胡適は役に立つかどうかの「功利」的な態度を取らず、學術的な態度を取るのである。

二つ目に「注意系統的整理」を挙げる。これをどのように系統的に整理するのか。胡適は「（甲）索引式的整理。（乙）結賬式的整理。（丙）專史式的整理」の三つを挙げる。そして（丙）で「國學」の目的をこういう。

我們理想中的國學研究，至少有這樣的一個系統：

中國文化史：（一）民族史（二）語言文字史（三）經濟史（四）政治史（五）國際交通史（六）思想學術史（七）宗教史（八）文藝史（九）風俗史（十）制度史。

以前の「新思潮的意義」では「整理國故」の目標を「眞面目」「眞價值」を見出そうとしたが、それがここで中国の膨大な文化史を編纂するという具体的なものになっていった。

三つ目は「博採參考比較的資料」である。ここで胡適は孤立している中国學術を批判し、もっと広く海外の手法を取り入れるべきであると述べる。

第一、方法上、西洋學者研究古學的方法早已影響日本的學術界了、而我們還在冥行索塗的時期(～中略～)。

第二、材料上、歐美、日本學術界有無數的成績可以供我們的參考比較、可以給我們開無數新法門、可以給我們添無數借鑑的鏡子(～中略～)

西洋及び日本の學術⁽⁵⁾の成果を取り入れ、自分たちの參考にすべきと述べた。

この論文は「上自思想學術之大、下至一個字、一隻山歌之細、都是歷史、都屬於國學研究的範圍」が表しているように、決して學生にこのような態度で臨めと言っているのではなく、「國故」を整理する學者のとるべき態度、そして方法を論じ、その扱う範圍は極めて膨大であるといえ、一朝一夕にできるものではない。學者が何年もの歳月をかけて行う事業である。そして胡適自身はこの態度、方法を用いてその後禪宗などの研究を行うのである。

2. 教育者の立場から。

『國學季刊』の発刊と同じ年の10.28日に興味深い記述がある。それが「擬“整理國故”計画(『胡適遺稿及秘藏書信』13卷)である。ここでは學者の為に如何に「整理國故」をするのかを説くのではなく、青年の為に如何に「整理國故」を展開するかを述べている。

ここでも胡適は「整理國故」をしなければ、少年に古書を読ませることはできないと従来の説を繰り返し、価値ある古書の整理の仕方などを説く。

まず胡適は整理の最低条件を挙げる。

- (一)校勘;
- (二)必不可少的注釈;
- (三)標點;
- (四)分段;
- (五)考証或批判的引論;
- [(六)]索引。

そしてこの五つを挙げ、校勘、注釈、引論について述べた後、整理すべき書物を37冊挙げる。

- 1.『詩經』(兪平伯);
- 2.『書經』(馬幼漁);
- 3.『春秋左氏傳』;
- *4.『論語』(鄭奠)、『孟子』、『荀子』;
- *5.諸子文粹(劉文典);

- *6.古史家文粹
- *7.『論衡』(劉文典);
- *8.『史通』(朱邊先);
- *9.韓愈(鄭介石);
- *10.歐陽修(單不廣);
- *11.王安石;
- *12.蘇軾;
- *13.朱熹;
- *14.王守仁;
- *15.崔述(顧頡剛);
- *16.清代經學大師文選(沈兼士);
- *17.姚鼐;
- *18.曹國藩;
- 19.『周礼』;
- 20.『楚辞』;
- *21.唐以前詩(尹默);
- *22.唐詩(沈尹默);
- *24.詞選(胡適);
- *25.戲曲選(顧);
- 26.陶潜
- 27.杜甫
- 28.李白
- 29.白居易
- 30.陸游(沈兼士);
- 31.楊万里;
- 32.辛棄疾;
- 33.『札記』(節本);
- 34.柳宗元;
- 35.章學誠;
- 36.戴震(胡);
- 37.秦漢儒家文選。」

(沈尹默)

このように大量の書物を挙げ、さらにこの書目について、以下のよう
に付け加える。

以上有*記號者、是新學制高級中學用書、故列爲第一批。

整理した上で教科書に採用、その整理を担当する人間まで決定し、し
かも続けて、

出版方法:現由商務印書館提出此項整理的書酬報辦法、大略如下:

(一) 商務愿收買此項經過整理過的書。酬報約分三種,以整理功夫之難易爲酬報標準:

第一種,每部二百元;

第二種,每部三百元;

第三種,每部四百元;

(二) 大部或特別困難之書,酬報另議。

(三) 此項酬報,包括上文所述整理的五事(標点、注釈等)

(四) 出版之後,此項書籍之版權歸商務所有。

商務印書館から出版、整理の難易度によって価格まですでに決めていることを明確に記載している⁽⁶⁾。このことからわかるように、明らかに「整理國故」は古文の教科書を作成、出版、販売という極めて具体的な一面もあったのである。

<結語>

これまで『新潮』の‘国故と科学’の論争から胡適の「整理國故」に対する態度をみてきた。当初『新潮』の編集者、傅斯年、毛子水等の北京大学学生から始まった‘国故と科学の論争’は、中国の過去の歴史を「材料」とし、それを「科學の精神」で中国學術を再編成していこうとするものであったが、「國故」は「歐化」の後塵を拝すものであった。

しかしその当時文学界ですでに名を馳せていた胡適がこの運動に参加するようになると、『新潮』は鳴りをひそめ、胡適の独壇場となる。

胡適は『新潮』の‘国故と科学の論争’の動きに先駆け、「國語」をどのように扱うかに付随した形で、「古文」を「外国語」と同様のものとし、「國語」と対等の位置を与えた。その後、「國語」に比べると注目されていなかった「古文」の充実を計り、中学生の用いる教科書の「古文」を魅力的で、学びやすいものとする為、「整理國故」は不可欠なものと主張したのである。そして最終的には整理する書目、その担当者、及び出版社から価格まで計画するという、極めて具体的なものとなった。この胡適の教科書にたいするアプローチは、その当時も現在もあまり注目されてこなかった。近代の教育、特に教科書制定を考える上では見逃せない箇所である。

その一方で、『新潮』が提唱した中国學術の再編成を引き継ぎ、「爲眞理而求真理」の立場で、「國故」の二次的な扱いを否定し、中国の古典を科学的に分析、整理するという一面もこの運動には含まれている。そしてこれの成果として「國學季刊」の発刊や「禪宗史草稿」等の古典の研究を行った。

その後1923年にはいると様々な立場から賛成、反対の声が上がる。主なものとして賛成の立場は、「整理國故」に賛同した論文を多数掲載した

『小説月報』(1923、1、10 掲載者は鄭振鐸、顧頡剛など)、反対者は創造社の郭沫若、成仿吾、そして魯迅などがいる。しかし賛成、反対の両方が学術的に中国古典文化をどのように整理、評価するかに言及がされるだけで、教科書にどのような「古文」を掲載するかという問題には触れていない。

《注 釈》

- (1) 傅斯年(1896~1949)字は孟真。山東の人。1920年ロンドン大学、1923年ベルリン大学に留学。帰国後中山大学教授。1932年『独立評論』に参加。1949年1月台湾に移る。著作に「新潮的回顧與前瞻」「與顧頡剛論古史書」「周頌說」等がある。

毛子水(1893~1988)名は准、浙江江山の人。1913年北京大學数学系で学ぶ。1920年ベルリン大学に留学。1930年帰国した後、中山大学、北京大学教授を勤める。1949年台湾に移り、台湾大学文學院教授、中央研究院評議員を歴任。著作に『毛子水文存』『湯誓新説』などがある。

- (2) 樸學家の方法 傅斯年は清代の學問を「清代的學問、狠有點科學的意味、用的都是科學的方法」と述べ、清代の學問を高く評価している。そして樸學を「清代學問の範圍、只以四派爲限。第一是樸學派。這派是清代學問裏最大的一派。」とする。

- (3) 省略部分は、

但是怎樣的人,用什麼方法,才可以整理國故呢?我現在敢說,不是曾經抄拾過歐化的人,不是用科學的方法,一定不能整理國故,一就是整理起來,對於世界的學術,也是沒有什麼益處的。至於蔑視國故的人,我們應當說他沒有「方隅的眼光」,不應當他沒有世界的眼光。

- (4) 民國元年『中學校令施行細則』

正しくは『中學校令施行規則』。民國元年十二月二日に公布された。第一章・学科及程度、第一條から第十八條。第二章・学年学期休業日授業日数及典禮日、第十九條から第二十二條。第三章・編成、第二十三條から第二十七條。第四章・設備、第二十八條から第三十六條。第五章・設立變更及廢止、第三十七條から第四十條。第六章・入學轉學退學及懲戒、第四十一條から第五十一條。第八章・附則、第五十二條。第三條の全文は、

國文要旨在通解普通語言文字能自由發表思想並使略解高深文字涵養文學之興趣兼以啟發智德。

國文首宜授以近世文漸及於近古文並文字源流文法要略及文學史之大概使作實用簡易之文兼課習字。

- (5) 日本の学術 この頃胡適が影響を受けた人物の一人に青木正児が挙げられる。この間胡適が青木正児に送った手紙は、1920年9月25日、11月11日、11月18日、12月14日、12月24日、1921年は2月3日、4日、2月8日、5月19日と多数にのぼる。最初は青木正児が雑誌『支那學』を送ってくれたことに対する返礼だが、後は内藤湖南

の「章實齋先生年譜」(1920年『支那學』掲載)や「水滸伝」等に議論が及ぶ。しかしどの程度「整理國故」に影響したかは未詳。

(6) 胡適が計画したように商務印書館から出版されたかは不明。

《参考文献》

『胡適全集』李羨林主編 2003年9月 安徽教育出版社。

『胡適文存』胡適著 中華民國42年 遠東圖書公司。

『胡適論争集』耿雲志主編 1998年9月 中国社会科学院出版社。

『胡適書信集 上・中・下』耿雲志、歐陽哲生編 1996年9月 北京大学出版社。

『努力周報』胡適主編 1999年9月 岳麓書社出版。

『新潮』1986年4月 上海書店。

『小説月報』小説月報社編 商務印書館。

『胡適与整理国故論考—以中国文学研究為中心』徐雁平著 2003年6月 安徽教育出版社。

『胡適与中国文化轉型』宗劍華著 1996年7月 黑竜江省出版社。

『胡適思想の研究』山口榮著 平成十二(2000)年二月二十九日 言叢社。

「“整理国故”的再評價」魏紹馨著 1983年『文学評論』第三期 中国社会科学院出版社。